

新奇な隠喩文の理解を支える方向づけの比喩¹⁾

佐山 公一

要 約

本論文では、英語でよく使われる隠喩文の英語母語話者にとっての理解しやすさを、それら隠喩文を単純に日本語に置きかえた文の日本語母語話者にとっての理解しやすさと比較し、とくに新奇な隠喩として理解する場合を中心に、隠喩文の理解過程の性質を考察する。新奇な隠喩として理解する場合、ソース（たとえる対象）とターゲット（たとえられる対象）との間に新しい対応関係を心内に作ることが必要である。この対応関係を作ることができるか否かは、ターゲットの“属性”とソースの“属性”との間にマッチングを作ることができるかどうかで決まるが、マッチングが成立するかどうかは、最終的に方向づけの比喩（orientational metaphor ; Lakoff & Johnson, 1980）に至る尺度概念の連鎖（佐山, 1996）を参照できるか否かにかかっている。ただし、実際に隠喩的な理解に必要とされるのは問題となっているマッチングび対応する尺度概念の対だけである。なぜこうした尺度概念の連鎖によって隠喩的な理解が支えられているのかを説明するために、マッチングの意味的な分類が行われ、その分類にもとづいてマッチングと尺度概念の連鎖との関係がさらに詳しく考察される。隠喩的な発話は話者の主観的な評価を運ぶことが主張される。そして、

1) 方向づけの比喩とは、上下関係、前後関係などの空間的な関係と、量の多寡、温度の高低などとの知覚的な経験を通じた結びつきのことを言う（Lakoff & Johnson, 1980）。

その主観的評価がさらに皮肉、ユーモア、誇張などの心理的效果を生じさせることが説明される。最後に、アナロジー推論および直喩の形式をもつ発話の理解のそれぞれが、隠喩的な理解と比較される。

隠喩的な意味関係はどのようにして作られるか？

ある外国語の母語話者にはよく知られているが、今問題にしている言語の話者には知られていない隠喩文を、問題の言語に機械的に置きかえて文を作り、その話者に聞かせたとしよう。その際、文脈を提示して特定の解釈に誘導することはしないものとして。そうすると、もとの外国語の文をその外国語母語話者が解釈するのとほぼ同じ意味でその文を解釈できる場合とできない場合が出てくる²⁾。

(1a) Sally is a block of ice. (Searle, 1979, より)

(1b) サリーは氷の塊だ。

たとえば、文例 (1a) は、“サリーが精神的にとっても冷たい”ことを意味する (Searle, 1979) が、この英文の個々の単語を単純に日本語に置きかえた文 (1b) を、英語母語話者が受けとる意味に近い意味をもつものとして日本語母語話者も理解できるであろう。

(2a) My surgeon was a butcher. (Glucksberg & Keysar, 1990, より)

(2b) 私の外科医は肉屋だった。

これに対し、(2a) は“私の外科医の手術の技術がきわめて劣っていた”こと

2) 原語の単語とできるだけ意味が重なり、かつ (後に説明するのと同じ意味で) 主観的な価値評価を含まない単語を選んだとする。

を意味する (Glucksberg & Keysar, 1990) が、これに対する文 (2b) は、この文単独では日本語母語話者には理解しにくいように思われる。

日本語母語話者にとって、(1b) も (2b) もよく耳にする表現ではない。(1b)の方が (2b) よりも理解しやすいということは、“サリー”と“氷の塊”との間の方が“私の外科医”と“肉屋”の間よりも意味的な関係をつけやすいということの意味する。原語から置きかえられた文の中に、新奇であると感じながらも隠喩として理解できる、すなわち、ソース (たとえる対象) とターゲット (たとえられる対象) との間に意味的關係をつけやすいものと、そうでないものがあるのはなぜであろうか？ なぜこのような違いが生じるのであろうか？

最も単純な場合、すなわち、日本語の“AはBだ (または、である)”, 英語の“A is B”のように、二つの名詞 (句) が、“は”や“is”といった繫辞 (copula) によって結びつけられている文に限定して考えてみよう。繫辞自体にはターゲットAとソースBを繋ぐこと以外にあまり意味がなく、こうした単純な形の文を理解することは、AとBの意味関係を計算することと考えてよいであろう³⁾。とすると、この単純な文形式をとる英語の隠喩文から“直訳”された日本語の文を隠喩として解釈しようとするとき、文例 (1b) のような日本語文の場合には、日本語母語話者にとってターゲットAとソースBとの間に何らかの意味関係をつけることが容易であるが、(2b) のような日本語文の場合にはそれが困難である、ということになる。こうしたAとBの意味関係のつけやすさ、すなわち隠喩としての理解しやすさは、隠喩文の理解過程の中でどのように説明されることになるのであろうか？

3) “AはBだ (または、である)” の文形式をとる日本語文の一般的な意味解釈過程については、阿部・佐山 (1990), 佐山・阿部 (1990a, 1990b, 1990c) に詳しい説明があるので、そちらを参照されたい。

マッチングの分類

発話を隠喩として理解するメカニズムに関し、これまで多くの見解が提案されてきている（たとえば、Gentner & Wolff, 1997; Glucksberg & Keysar, 1990; Lakoff, 1993; Ortony, 1979; Searle, 1979, など）。いずれの見解にせよ、理解の結果として、ターゲットの属性とソースの属性の間にマッチングが成立するという点では一致する。そこで本節では、ターゲットの属性とソースの属性の意味的な性質にもとづき、マッチングの分類を試みる。

隠喩的なマッチング

“A is B”の文を隠喩として理解したとき、ターゲットAの属性とソースBの属性との間に成立するマッチングが“隠喩的”になることがある (attribute inequality; Ortony, 1979)。

(3) Sally is a block of ice.

冒頭に挙げた文例(3)を英語母語話者が隠喩として理解したとしてみよう。その結果、“Sally”の“cold”, “cool”等の属性と“a block of ice”の“cold”, “cool”等の属性との間にマッチングが生じる。その際、“Sally”の“cold”, “cool”が、感情に関する属性であるのに対し、“a block of ice”の“cold”, “cool”は物理的な属性であり、それゆえ両者は隠喩的に対応している。つまり、厳密に言えば両者は異なる属性である、ということになる。異なる属性どうしであるにもかかわらずマッチングが成立するのは、次の章で詳しく説明するように、最終的に方向づけの比喩に至る尺度概念の連鎖がそうしたマッチングを支えているからである。

(4) Encyclopedias are gold mines. (Ortony, 1979, より)

同様に、文例 (4) を英語母語話者が隠喩的に理解したとしよう。結果的に、“encyclopedias” の “valuable”, “precious” といった属性と “gold mines” の “valuable”, “precious” との間にマッチングが成立する。その際、“encyclopedias” の “valuable”, “precious” が知性に関する属性であるの対し、“gold mines” の “valuable”, “precious” は金銭的な属性であり、両者は隠喩的に対応している。

同一性のマッチング

(5) My surgeon was a butcher.

すべての隠喩的な理解が、隠喩的なマッチングとして説明されるわけではない。たとえば、文例 (5) を英語母語話者が隠喩として理解したとすると、“my surgeon” の “unskillful”, “clumsy” 等の属性と “butcher” の “unskillful”, “clumsy” 等の属性との間にマッチングが作られることになる。その際、“my surgeon” の “unskillful”, “clumsy” も “butcher” の “unskillful”, “clumsy” も同じ属性であり、それらの間の対応関係は同じ属性どうしのマッチングになる。本論文では、こうした同じ属性間のマッチングを “同一性のマッチング” と呼んでおくことにする。

(6) Sam is a pig. (Searle, 1979, より)

同様に、文例 (6) を英語母語話者が隠喩的に理解したとしよう。結果的に、“Sam” の “filthy”, “gluttonous” といった属性と “pig” の “filthy”, “gluttonous” といった属性との間にマッチングができる。“Sam” の “filthy”, “gluttonous” も “pig” の “filthy”, “gluttonous” も同じ属性であり、それらの間のマッ

ングは同一性のマッチングということになる。

隠喩的なマッチングと同一性マッチングとの違い

同一性のマッチングは、隠喩的なマッチングの場合とどのような違いがあるのであろうか？ 隠喩的なマッチングと同一性のマッチングとの違いは、概念どうしの関係をネットワークによって表わすと明確になる。隠喩的なマッチングになる場合のターゲットAの指示する概念とソースBの指示する概念、およびそれらの属性との間の関係が Figure 1 に図示されている。隠喩的なマッチングになる場合には、ターゲットAの指示する概念ソースBの指示する概念とが別々に属性概念を持っている。これら属性概念をデータとして利用する際、それぞれの名前は同じであるにもかかわらず我々はこれら属性を混同せずに利用している。これが可能な理由は、図に示すように、ターゲットに対応する概念とソースに対応する概念とが“遠い”関係にある、すなわちターゲットAの概念とソースBの概念に共通する上位概念とターゲットの概念、ソースの概念との間に介在する概念がそれぞれの間によくあるためであると考えられる。たとえば、文例 (4) を理解した場合の“encyclopedia”と“gold mine”は“entity”

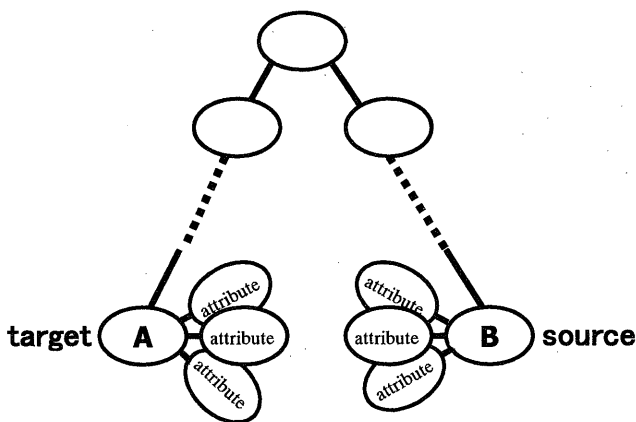


Figure 1. A typical example in which the matching is metaphorical.

あるいは“thing”のような上位概念を共有すると考えられるが，“entity”は“encyclopedia”，“gold mine”の両方から離れた概念である。

同一性マッチングになる場合のターゲットAの指示する概念とソースBの指示する概念，およびそれらの属性との間の関係が Figure 2a, Figure 2b, Figure 2c, に示されている。Aの概念およびBの概念がそれぞれにもつ属性は，Figure 2aのように，Aの概念，Bの概念に共通する上位概念の属性とみなされる場合と，Figure 2b, Figure 2cのように，Aの概念またはBの概念の一方が他方の上位概念になっていて，その上位概念（すなわちAの概念またはBの概念）の属性になっている場合とがある。いずれの場合にせよ，継承

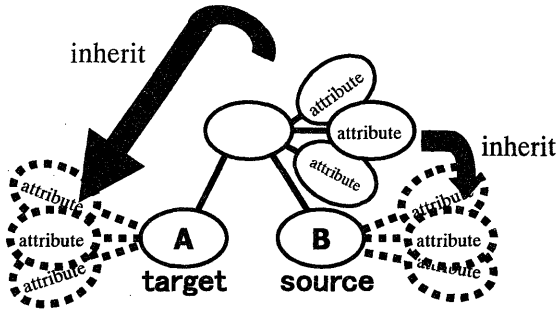


Figure 2a. An example in which the matching is identical.

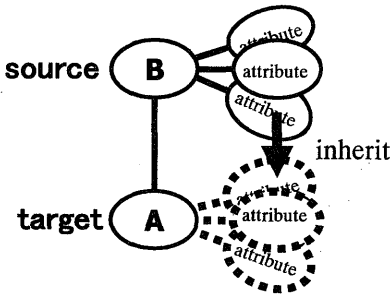


Figure 2b. An example in which the matching is identical.

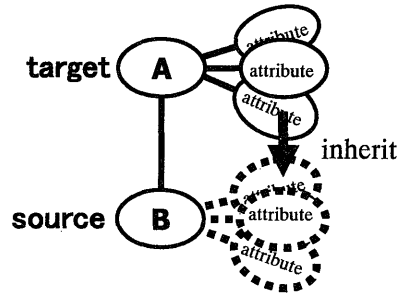


Figure 2c. An example in which the matching is identical.

(inheritance) の仕組みによってAおよびBの概念属性とみなすことができるようになっていいるものと考えられる。Aの概念とBの概念との間、またはAの概念とBの概念の上位概念とA、Bの概念との間に、それぞれ、別の概念が介在する場合もあり得るが、Aの概念とBの概念、または上位概念とA、Bいずれかの概念とは近いことが多いであろう。近いほど、属性の継承にかかる処理負担が少なくてすむからである。

文例 (5) を解釈した場合の“surgeon”と“butcher”との間の関係はFigure 2aの場合にあたる。“unskillful”, “clumsy”等の属性は“surgeon”, “butcher”ではなく、これらの上位概念“human being”の属性と考えられる⁴⁾。

また、“doctor”の社会的な役割に関する属性を使って(14)を理解した場合(p. 116を見てほしい)の“John”と“doctor”との関係は、Figure 2bの場合に相当する。さらに“warrior”のステレオタイプの属性を使って(7)を解釈した場合の“man”と“warrior”との関係は、Figure 2cの場合になる⁵⁾。

(7) Man is a warrior

次の章では、マッチングのタイプごとに、隠喩的な理解過程において長期記憶領域の中のこうした語彙や概念の情報がどのように参照されるかを考えてみることにしよう。

4) “surgeon”の“unskillful”, “clumsy”等の属性は人体を解剖するときに言及されるもので、“butcher”の“unskillful”, “clumsy”等は食肉を切るときに言われるものであり、両者は異なる、と考える人がいるかもしれない。これは事実であろうが、長期記憶領域内のデータとしては“surgeon”の“unskillful”, “clumsy”等も“butcher”の“unskillful”, “clumsy”等も同じで“human being”に付与されていると考えられる。このことは、“すずめ”と“白鳥”とでは、それぞれの飛び方は異なるが、“鳥”に付与されている“飛ぶ”という属性を両者に継承できるのと同じである。

5) 日本語で言う“男は戦士だ”と同じ意味になる。

尺度概念の連鎖

新奇的な隠喩として理解でき、ターゲットとソースの属性の間に新たなマッチングが作られ得るためには、そのマッチングを根底で支える尺度概念の対を仮定することが必要である。そうした尺度概念対は、連鎖的に他の尺度概念対とつながっており、最終的に、空間の上下関係を表す方向づけの比喩に至る。方向づけの比喩は、Lakoff and Johnson (1980) の言う概念的比喩⁶⁾ (conceptual metaphor) の一種である。概念的比喩には、方向づけの比喩の他、存在の比喩 (ontological metaphor)、構造的比喩 (structural metaphor) の2種類がある⁷⁾。方向づけの比喩がこれら2種類の概念的比喩と異なる点は、方向づけの比喩が、連続的な程度差をもつ二つの尺度概念どうしの対応からなる点である。たとえば、空間の“up / down”を量の“more / less”に対応づける概念的比喩のようにである (Figure 4, Figure 5a などを見ていただきたい)。以下に例証されるように、方向づけの比喩が連続体をなすということが、この概念的比喩が、隠喩的な理解の中で特別な地位を占める理由になっている。以下、マッチングのタイプごとに、尺度概念の連鎖とはどのようなものか、および、尺度概念対がどのように参照されるかを、具体例を用いて説明したいと思う。

-
- 6) 概念的比喩とは、知覚的な体験を介した概念と概念との間の対応関係のことをいう。我々は、知的活動を行うために、心内の長期記憶領域に知識の体系をもっているが、そうした知識体系はいくつかの基本的な概念間の意味関係からなっている。たとえば、集合関係や全体部分関係 (whole-part relation) のような意味関係である。概念的比喩もこうした我々の知識体系を構成する基本的な意味関係の単位の一つとされている (Lakoff, 1987, 1990; Lakoff & Johnson, 1980; Lakoff & Turner, 1989; Martin, 1990, 1992; 山梨, 1982, 1988)。
- 7) 存在の比喩とは、心、感情、考えなどといった輪郭のない抽象的な概念と、人や食べ物、資源などといった輪郭のある具体的な概念との対応関係をいう (Lakoff & Johnson, 1980)。また、構造的比喩とは、恋愛、議論のような、様々な側面をもった複雑な抽象的概念と、何らかの具体的な概念との対応関係で、様々な側面の一つ一つに具体的な概念が対応しているようなものをいう (Lakoff & Johnson, 1980)。いずれにせよ、これらが連続体をなす概念どうしの対応であるかどうかははっきりしない。

隠喩的なマッチングの場合

(8a) Sally is a block of ice.

(8b) サリーは氷の塊だ。

すでに述べたように、英語母語話者が文例 (8a) ((1a), (3) と同じ) を隠喩として理解したとすると、“Sally”の属性と“a block of ice”の属性との間に隠喩的なマッチングが作られる。このマッチングが隠喩的であってかまわない、すなわち、“cold”や“cool”といった属性の名称そのものは同じであるが、実際には異なる属性であってかまわない理由は、Lakoff (1993) が指摘しているように、Figure 3にあるような尺度概念対、すなわち感情の尺度概念“warm/cold”と温度感覚の尺度“warm/cold”との間に経験的な結びつきがあるからである⁸⁾。この文の解釈が“サリーが精神的に冷たい”ことである

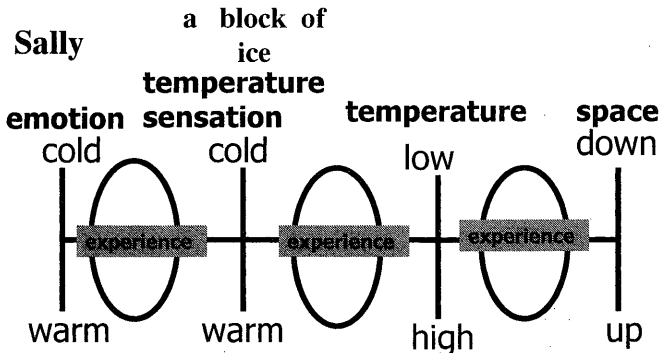


Figure 3. The chain of scale concepts that underlies the metaphorical comprehension of “Sally is a block of ice”.

8) Lakoff (1993) は、文例 (8a) を英語母語話者が理解できるのは、“AFFECTION IS WARMTH” という概念的隠喩があるからであるとしているが、これは正確ではないと思う。この概念的隠喩は、感情の“warm/cold”と物理的な温度の“high/low”との対応関係を示しているとも受けとれるからである。ただ、(8a) のような文を隠喩として理解する際、Figure 3 のような尺度概念対を参照する点が重要であるので、このことは本質的なことではない。

ためには、“a block of ice”から温度感覚の“warm/cold”の尺度概念が呼び出される必要がある。温度感覚の尺度が呼び出され得るためには、それ以前に“a block of ice”の属性“cold”や“cool”（ともに物理的な意味で）が検索されている必要がある。確かに、英語母語話者が“a block of ice”から即座に連想できる属性は、そうした属性である。これらの属性が連想しやすいということは、それらが“a block of ice”の顕著な属性であることを意味している。実際、文脈情報が理解に利用される前に、単語の顕著な意味は常にアクセスされるとする主張（Giora, 1999）もある。

これとほぼ同じ説明が、日本語母語話者が文例（8b）を隠喩として理解した場合にもあてはまる。これが、英語の文（8a）から機械的に日本語に置きかえられた文（8b）の日本語母語話者による解釈が、英語母語話者による（8a）の解釈と同じになる理由である。

ところで、Figure 3 における、温度感覚の“cold/warm”と感情の“cold/warm”の間の経験的な結びつきは、（8a）、（8b）のような言語表現を過去に繰り返して理解あるいは産出した結果として結びついたものなのであろうか、それとも言語活動とは直接関係のない知覚的な経験の結果として結びついたものなのであろうか？ 言語活動の結果ではない知覚経験による結びつきが本来概念的比喩と呼ばれているものである（Lakoff & Johnson, 1980）が、こうした概念的比喩の大部分が実際には言語活動の結果であると主張する研究者（Murphy, 1996）もいる。隠喩的な理解に利用される尺度概念の連鎖が、言語活動によって結びついたものか、知覚経験によって結びついたものかに関する議論は、隠喩文の理解過程を解明する上で避けて通れない重要な問題である（Gibbs, 1996）が、ここでは触れないことにする。

(9a) Encyclopedias are gold mines.

(9b) 百科事典は金鉱だ。

(8a)、(8b) の場合と同様の説明が、文例 (9a) ((4) と同じ)、(9b) の場

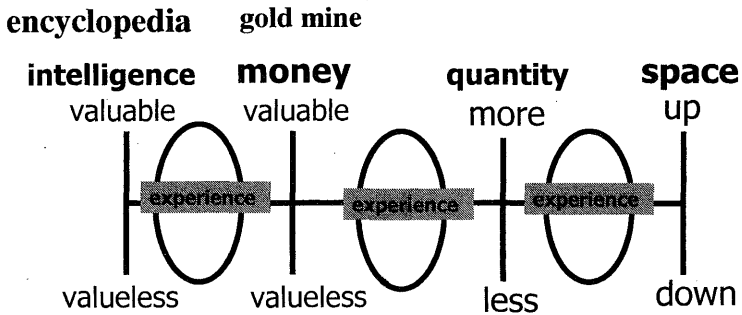


Figure 4. The chain of scale concepts that underlies the metaphorical comprehension of “encyclopedias are gold mines”.

合についても成り立つ。(9a)の隠喩的理解を成立させるために英語母語話者が参照するであろう尺度概念対が Figure 4 に示されている。英語母語話者が (9a) を理解した場合、知的価値の “valuable/valueless” と金銭的な価値の “valuable/valueless” との間の対が参照される。その際、“gold mines” から金銭的な価値の尺度概念が、容易に呼び出される。呼び出されることを容易にしているのが、“gold mines” の属性 “valuable” (金銭的な意味での) の高い顕著性である。

日本語母語話者が文例 (9b) を理解したときにも、Figure 4 にあるような金銭的な価値の尺度概念が “金鉱” から呼び出されるかもしれない。日本語母語話者にとっても、属性 “valuable” は、金鉱の顕著な属性であろう。その結果、(9b) は日本語母語話者にとっても、新奇ながら理解し得る文になる。

では、文例 (10a), (10b) の場合はどうであろうか。

(10a) Juliet is the sun. (Searle, 1979 より)

(10b) ジュリエットは太陽だ。

文例 (10a) を英語母語話者が理解したとすると、Figure 5a における物理的な明るさの尺度概念 “brighten/darken” と存在の明るさの尺度概念

“brighten/darken” との間の尺度概念対が使われる。ここで、存在の明るさという属性は、ジュリエットにだけあてはまるものではなく、女性が一般的にもつ属性と考えられている。したがって、この説明では、ソースAはジュリエットでなくても女性であれば同じ意味に受け取られることになる。

日本語母語話者が文例 (10b) を解釈した場合も、英語母語話者が (10a) を理解した場合とほぼ同じような意味で、したがって、Figure 5a と同じ尺度概念対が参照される。ただ、日本語でも“女性は太陽だ”という表現は慣習化されているので、解釈の結果日本語母語話者が (10b) に新奇性を感じることはない。

ところで、シェイクスピアの演劇“ロミオとジュリエット”の中では、文例 (10a) は“ロミオの一日がジュリエットとともに始まりジュリエットとともに終わる”といった意味に使われている (Searle, 1979)。日本語版の“ロミオとジュリエット”があり、その中で (10b) のようなセリフが使われていたとすれば、その意味は英語版の (10a) と同じになるであろう。こうした意味に解釈される場合には、ソースAは“ジュリエット”に限定される。

とすると、“ロミオとジュリエット”をよく知っている人は、文例 (10a) (英語母語話者の場合) や (10a) (日本語母語話者の場合) を、劇場の外でも、慣習的な意味とは別の意味に解釈する可能性がある。また、“ロミオとジュリエット”を初めて見る人は、劇場の中で、ロミオのセリフ (10a) や (10b) に新奇性を感じるかもしれない。いずれの場合にせよ、彼 (女) の心内では、Figure 5a の尺度概念対ではなく、Figure 5b におけるような、存在の重要度 (同一性のマッチングになる) を表す尺度概念の間の対が参照されるであろう。

“ロミオとジュリエット”に精通した聴者には文例 (10a) や (10b) を二通りの隠喩的な意味に解釈できる可能性がある。ただ、発話や単語にたとえ二通り以上の意味があり得、しかも特定の解釈を促す文脈などなしに問題の発話や単語を与えられても、人はそれを一通りに解釈する傾向がある (Just & Carpenter, 1980)。したがって、少なくとも会話の中では、たとえ“ロミオとジュリエット”をよく知っている聴者であっても、一通りの解釈しか思い浮かべな

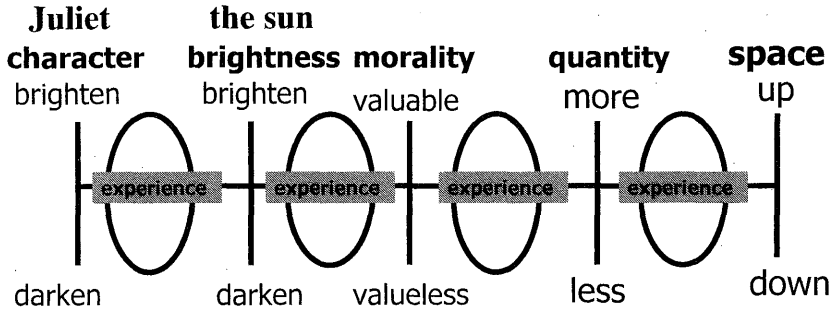


Figure 5a. The chain of scale concepts that underlies the metaphorical comprehension of “Juliet is the sun”.

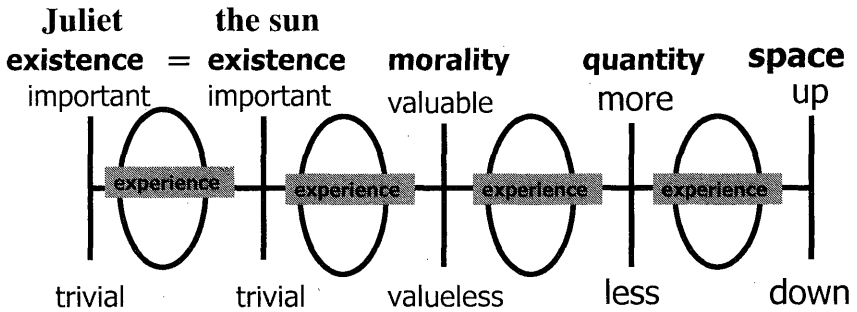


Figure 5b. The chain of scale concepts that underlies the metaphorical comprehension of “Juliet is the sun”. “=” shows that two important / trivial scales are the same.

いかかもしれない。これに対し、後述するように、推論のために十分な時間が与えられアナロジ的な推論を行った場合には、Figure 5a, Figure 5b 両方の尺度概念対が参照されるかもしれない。(良い隠喩ではなく) 良いアナロジとは、ソースとターゲットとの間の関係を複数考えることができることである (Gentner, 1983)。それゆえ、Figure 5a, Figure 5b のような複数の概念的比喩の連鎖を使うことができるということが、良いアナロジであるための必要条件であると言えるかもしれない。

同一性マッチングの場合

同じ属性間のマッチングになる場合は、同じ属性どうしであるから、属性を選択しさえすればマッチングは成立することになる。とすると、同一性マッチングになる場合には、マッチングを支える尺度概念の連鎖は必要ないのであろうか？ 次節で述べるように、隠喩文は話者の主観的評価を伝える。そうした情報を伝え得るためには、同一性マッチングの場合であっても、方向づけの比喩に至る尺度概念の連鎖によって支えられている必要がある。ここでは、同一性マッチングの場合のマッチングとこうした尺度概念の連鎖との関係を考える。

同一性マッチングになる場合、既存の尺度概念対を構成する尺度概念が経験を介して一時的にコピーされ新たな尺度概念対が作られそれが使われることが多い。たとえターゲットAにマッチングの対象になる属性がない場合であっても、すなわち属性が導入 (introduce) される (Ortony, 1979) 場合であっても尺度概念も同時にコピーされるので問題は起こらない。同一性マッチングの場合、同じ尺度概念どうしからなる対が利用されるので、尺度概念対そのものはさほど重要な情報にはならない。むしろ重要な情報になるのは、快/不快の程度、社会的容認度、危険性などといった話者の否定的な (ときには肯定的な) 主観的評価である。そして、その評価の大きさは、尺度概念上の値として示される。例を使って、具体的に説明しよう。

(11a) My surgeon was a butcher.

(11b) 私の外科医は肉屋だ。

先に挙げた文例 (11a) を見てほしい。英語母語話者が (11a) を理解したとき、彼 (女) は “butcher” の顕著な属性 “unskillful”, “clumsy” を使って、手先の器用さに関する尺度概念, “unskillful/skillful” を呼び出す。この様子が Figure 6 に示されている。今、話者の外科医の腕が悪いことを初めて知らされた聴者は、話者の経験にもとづいて “my surgeon” にこの尺度をコピー

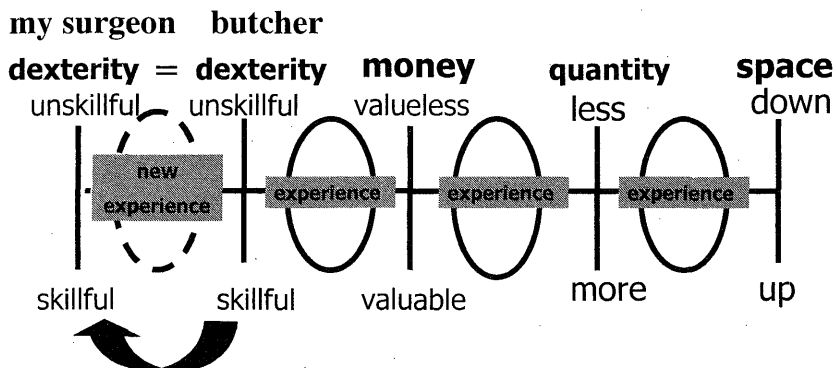


Figure 6. The chain of scale concepts that underlies the metaphorical comprehension of “my surgeon was a butcher”. “=” shows that two unskillful / skillful scales are the same. The curved arrow means that one scale was copied from the other because the new experience was acquired.

する。(11a) を聞いた聴者は、話者の外科医は腕が悪いという情報を得ると同時に話者が彼（女）の外科医に対して否定的な態度をとっているという情報を得る。話者の外科医と話者の間のエピソードはこの発話の前に詳しく語られているかまたは、後に語られることになるはずであるから、話者の外科医の腕が悪かったというこの発話自体がもつ情報は聴者にとって重要ではないであろう。むしろ重要な情報は、話者が彼（女）の外科医に対して否定的評価を下しているという情報である。“butcher”の手先の器用さに対する英語母語話者の評価は低く、尺度概念“unskillful / skillful”上で“unskillful”に近い値をとる。この尺度概念がそのまま“my surgeon”にコピーされるので、“my surgeon”の手先の器用さに関する評価も“unskillful / skillful”上で“butcher”と同じ“unskillful”に近い値になる。

さて、先に触れたように、(11a) を日本語に置きかえた文 (11b) は日本語母語話者にとって理解にくい。それはなぜであろうか？ その理由は、日本語母語話者にとって、“unskillful”, “clumsy”といった属性は“肉屋”の顕著な属性ではないので、手先の器用さに関する尺度概念“unskillful/skillful”を呼

び出すことが難しいからである。この尺度を呼び出そうと思うなら、あらかじめ文脈の中で、“unskillful”, “clumsy”等の属性を、陽に（あるいは陰に）提示し、前景化（foreground）しておく、すなわち顕著にしておく必要がある。もう一組、別の例をあげよう。

(12a) Sam is a pig.

(12b) サムは豚だ。

文例（12a）のように言われれば、英語母語話者はサムが大食で行儀が悪いといった意味に理解するであろう。その際、“gluttonous”, “disgusting”のような顕著な属性から Figure 7 に示される尺度概念対が参照される⁹⁾。しかし、日本語母語話者にとってはそうした属性は豚の顕著な属性ではないので、

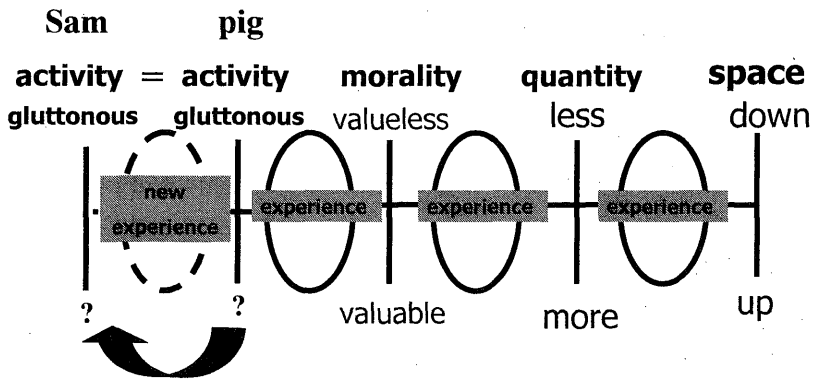


Figure 7. The chain of scale concepts that underlies the metaphorical comprehension of “Sam is a pig”. “=” shows that two gluttonous/? scales are the same. The curved arrow means that one scale was copied from the other because the new experience was acquired.

9) 英語には“gluttonous”と対をなすような一語の単語がない。日本語には“大食い”と対をなす“少食”という単語がある。

(12b) を聞かされても、英語母語話者が (12a) を理解するには理解しないであろう。英語母語話者にとって “filthy” は “gluttonous”, “disgusting” と同じくらい顕著である。日本語母語話者にとってはこれらのうちの “filthy” と対応する “汚い” だけが豚の顕著な属性である。日本語母語話者にとっても豚は汚い動物であるので、(12b) が否定的な評価を伝えているのであろうと言うことは分かる。しかし、大食いで下品だというような意味は、特定の解釈に導く文脈がない限り伝わりにくいように思われる。

同一性のマッチングの場合、話者の主観的な評価が聴者に伝えられる主たる情報になると述べた。こうした評価は、ときに皮肉や反語、ユーモア、誇張などといった心理的効果を聴者に与えることにもなる。文例 (13a), (13b) がそうした例であるかもしれない。

(13a) Cigarettes are time bombs.

(13b) タバコは時限爆弾だ。

文例 (13a) を英語母語話者が聞いたとすると、“time bombs” の顕著な属性 “dangerous” から、危険度の尺度概念 “dangerous/safe” が呼び出され、それが “cigarettes” にコピーされるであろう。この様子が Figure 8 に示されている。文例 (13a) の中のソース “cigarettes” は総称的 (generic) に使われている。総称的に使われた場合、発話は話者の信念を聴者に伝える¹⁰⁾。この場合、“どのようなタバコにも (一見、そのようには見えない場合があるかもしれないが) 危険がある” という話者の信念を伝えている。直接的な言い分を避け、(13a) のような言い方をされることによって、聴者はユーモアか誇張、またはその両方の心理的効果を得るかもしれない。あるいは、もし聴者が愛煙

10) 話者の信念を伝える場合を除けば、ターゲット A によって総称的に指示されるすべての対象に対して話者が否定的 (肯定的) な評価を下すことはあまりない。それゆえ、ターゲット A はときとして特称的 (existential) に解釈されたり、“my”, “私の” のような特定の対象に限定する所有形容詞が付与されたりする。

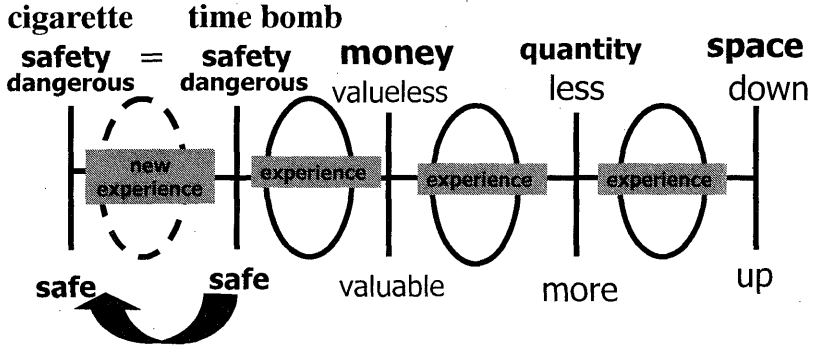


Figure 8. The chain of scale concepts that metaphorical comprehension of “cigarettes are time bombs”. “=” shows that two dangerous / safe scales are the same. The curved arrow means that one scale was copied from the other because the new experience was acquired.

家であったなら、皮肉か誇張（またはその両方）の心理的效果を受けとるかもしれない。

日本語母語話者も、文例 (13a) を日本語に置きかえた文 (13b) を、英語母語話者が (13a) を理解する場合と同じように理解するであろう。また、英語母語話者と同じように、ユーモア、誇張、皮肉といった心理的效果を受けとるかもしれない。

隠喩文は話者の主観的評価を伝える

Figure 5b, Figure 6, Figure 7, Figure 8 における同一性マッチングに関わる尺度概念の連鎖を見比べてみると、右側の部分が似ていることが分かる。これは偶然ではなく、話者の主観的な価値が、多くの場合、量の尺度概念 “more/less” と金銭的な（あるいは道徳的な）価値の尺度概念 “valuable/valueless” に結びつくことを示している。加えて、Figure 5b, Figure 6, Figure 7, Figure 8 の尺度概念の連鎖は、Figure 4, Figure 5a, における隠喩的なマッチングに関わる尺度概念の連鎖とも、右側

の部分と共有している。とすると、同一性のマッチングになる場合だけでなく、隠喩的なマッチングになる場合であっても、話者の何らかの主観的な評価をその他の情報とともに伝えている、と言えるのではないであろうか。ただ、とくに隠喩的なマッチングになる場合には、そうした主観的評価以外にも多くの情報を同時に運ぶので、本論文のような図示の仕方ではそのことが明確にならないことがあるかもしれない。実際、Figure 3における尺度概念の連鎖には、空間の尺度概念“down / up”以外には、共通する部分がないが、Figure 3の“Sally is a block of ice”の理解の場合でも、感情や温度感覚の冷たさに否定的な価値評価が付随しているとも考えられる。結局、隠喩文は話者の主観的な評価を伝えており、そこからさらに進んでユーモアや皮肉などの様々な心理的効果をももたらすものと言えるかもしれない。

さて、こうした話者の主観的評価は、絶対的に否定か絶対的に肯定かの二値的なものではなく、実際には、否定から肯定に至る一つの尺度上の連続値をとる。

(14) John is the doctor.

たとえば、文例(14)は、文脈によっては、“(ジョンは若くて医者の仕事に自信がなく頼りないように見えるが)充分医者役割を果たすことができる”というような意味に解釈できるかもしれない。そのような場合、ジョンの医者としての能力に対する否定的な面(文脈中で語られている)にも関わらず、医者としての職務遂行能力を肯定する発話として受け取られていることになる。ただし、医者としてのジョンに対する話者の評価は、絶対的に肯定というわけではなく、どちらかといえば肯定といった程度のものである。

コミュニケーション手段としての隠喩

これまで見てきたように、隠喩的な発話は、わずかな表現量にもかかわらず、多くの情報を一度に伝えたり、皮肉や誇張といった様々な心理的効果を与えたりすることができる便利なコミュニケーションの手段である（佐山、1992も参照されたい）。ここでは、こうしたコミュニケーション手段としての隠喩の特徴を、アナロジーおよび直喩の形式をもつ発話と比較することによって、より詳しく考察してみることにしよう。

隠喩的な理解とアナロジー推論との違い

隠喩として理解される際、ソースの属性とターゲットの属性との間に作られるマッチングが、尺度概念の連鎖の一部に対応していることはすでに述べた。会話のような、発話を瞬時に理解しなければならない状況では、当該マッチング以外の尺度概念対は、発話の理解に利用されないであろう。クイズのように、アナロジー推論を行う時間的な余裕が充分ある状況では、当該マッチングにつながるすべての尺度概念対が参照され得る。アナロジー推論を行う場合には、ソースをターゲットに関係づけることができさえすれば、どのような関係を考えてもよい。したがって、隠喩として理解される場合に使われるマッチングは、アナロジー推論に使われることもあるし、使われないこともある。このことを、文例（15）を使って考えてみよう。

(15) A lifetime is a day. (Glucksberg & Keysar, 1990, より)

Glucksberg and Keysar (1990) によれば、ソースとターゲットとの間の関係を考える時間が充分に与えられない実験条件下で、文例（15）は、英語母語話者の被験者によって、“人生とは短いものである” というような言いかえを与えられた、という。これとは対照的に、考える充分な時間の与えられた実験条件では、“一日の始まりである朝が人生の幼年期にあたり、一日の終わりで

ある晩が人生の老年期にあたる”などと、一日と人生との間のさまざまな対応関係が考えられた (Glucksberg & Keysar, 1990)。この結果は、(15) のような文を隠喩的に理解することと、アナロジー的に推論することとの違いを具体的に示している。

前節の説明に従うなら、文例 (15) に対する隠喩的な理解とアナロジー推論との違いは次のようになる。まず、英語母語話者が文例 (15) を隠喩的に理解したときには、“lifetime” の顕著な属性 “short” をもとにして、Figure 9 に示されるような時間に関する尺度概念 “short/long” が参照される。隠喩的な理解では、この尺度から量の “less/more”, 空間の “down/up” といった尺度概念は通常参照されないであろう。

対照的に、アナロジー推論では、これら尺度概念が参照されることがあり得る。もし参照されれば、“人生は坂道を下るようなものだ” と考えるかもしれないし、“一日が何もしないうちに過ぎてしまうように、一生もこれからが本当の人生だと思っているうちに終わってしまう” と考えるかもしれない。考える時間が充分あるから、一日と人生の共通点を無数に考えることができる、というわけである。

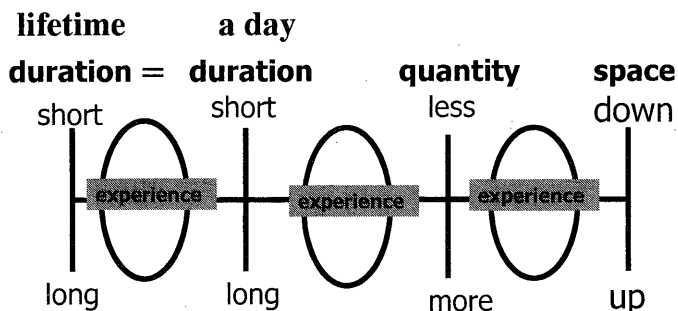


Figure 9. The chain of scale concepts that underlies the metaphorical comprehension of “a lifetime is a day”. “=” shows that two short/long scales are the same.

隠喩的な理解と直喩の形式をもつ発話の理解との違い

前節で触れたように、隠喩として理解される場合、伝達される主たる情報は、快／不快の程度、社会的容認度、危険性などといった話者のターゲットに対する主観的で否定的な（時には肯定的な）評価になるであろう。主観的な評価よりもむしろ、ソースの指示対象のターゲットの指示対象に対する類似が主たる情報となるのであれば、“like”, “as” など、類似を明示する言語学的標識 (linguistic marker) を付けて発話されている必要がある。

(16a) Cigarettes are time bombs.

(16b) Cigarettes are like time bombs. (Ortony, Vondruska, & Foss, 1985, より)

たとえば、“タバコが火をつけてからしばらくして忘れたところに爆発し、気がつかないうちに火災の原因になる危険なものである”という、話者のタバコに対する否定的な信念が伝えられるためには、文例 (16b) ではなく (16a) が用いられるであろう。そうではなく、“細長い形をしている点でタバコが時限爆弾に似ている”ことが伝えられるためには、(16a) よりも (16b) が使われるであろう。

結 論

外国語でよく使われる隠喩文の単語を機械的に置きかえて別の言語に変換した文の中には、それを特定の解釈を導く文脈なしに与えられると、その言語の母語話者にとって（新奇的な）隠喩として比較的簡単にできるものとそうでないものがある。本論文では、このような違いが、聴者が尺度概念の連鎖をうまく利用できるか否かによって生じることを、英語でよく使われる隠喩文の英語母語話者の理解を、その隠喩文を機械的に日本語に直訳した文の日本語母語話者の理解と比較し考察することによって詳しく例証した。もし日本語母語話者

が、尺度概念の連鎖をうまく利用できれば、そうした文を新奇な隠喩として理解できたことになる。

さて、本論文で述べてきたような尺度概念対を参照する過程は、より広く、文処理過程の中にどのように位置づけられるのであろうか？ これまで示してきた図をもう一度眺めていただきたい。一般に、言語を理解する過程および産出する過程は、我々の長期記憶領域に存在する様々な知識を適用する過程である (Winograd, 1983)。我々が、文を理解する際には、単語や文法に関する言語知識 (linguistic knowledge) および概念に関する世界知識 (knowledge of the world)、さらには、直接的あるいは間接的な経験にもとづくエピソード的な知識、問題となっている発話のおかれた具体的な発話状況やその発話を取りまく前後の言語的文脈などといった知識源を参照する (佐山・阿部, 1990a)。

繰り返し述べてきたように、会話のようなコミュニケーション場面では、時間と思考が制限されている。制限されているのなら、できるだけ少ない精神資源で効率的な認知処理が行われる、と考える方が自然であろう。文処理過程において最初に使われるのは、言語知識や世界知識である。こうしたことがらを考えあわせると、尺度概念の連鎖や概念的比喩も言語知識や世界知識の範囲内にある方が都合が良い。尺度概念対や概念的比喩は“経験”を通して結びついているが、ここで言う経験はエピソード的な知識とは異なるであろう。そうではなく、尺度概念対や概念的比喩は抽象化され、語彙や概念の知識の中に組み込まれている。会話の中で隠喩的な発話が頻繁に出てきても困らないのは、言語知識と世界知識を利用するだけで最低限の隠喩的理解が成立し得るからこそであると思う。

現在、筆者の研究室では、ポーランド語、中国語、韓国語などの“A is B”の文形式に相当する隠喩文を収集し、それを日本語に置きかえた文が、隠喩としてどの程度理解できるかを調べている。これらの文の中には、新奇ながら隠喩として理解できるものがある。外国語でよく使われる隠喩文から機械的に置きかえられた隠喩文は、隠喩的な理解と尺度概念の連鎖、さらには概念的比喩との間の関係を探る格好の素材である。

引用文献

- 阿部純一・佐山公一 (1990). 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化 (I) : 問題と知識表現. 日本心理学会第54回大会発表論文集, 683.
- Gentner, D. (1983). Structure-mapping : A theoretical framework for analogy. *Cognitive Science*, 7, 155-170.
- Gentner, D. & Wolff, P. (1997). Alignment in the processing of metaphor. *Journal of Memory and Language*, 37, 331-355.
- Gibbs, R. W. (1996). Why many concepts are metaphorical. *Cognition*, 61, 309-319.
- Giora, R. (1999). On the priority of salient meanings : Studies of literal and figurative language. *Journal of Pragmatics*, 31, 919-929.
- Glucksberg, S. & Keysar, B. (1990). Understanding metaphorical comparison : Beyond similarity. *Psychological Review*, 97, 3-18.
- Just, M. A. & Carpenter, P. A. (1980). A theory of reading : From eye fixations of comprehension. *Psychological Review*, 87, 329-354.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things : What categorization reveals about the mind*. Chicago : University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1990). The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics*, 1, 39-74.
- Lakoff, G. (1993). The contemporary theory of metaphor. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (2nd ed., pp. 202-251). Cambridge : Cambridge University Press.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago : University of Chicago Press. (レイコフ G. ジョンソン M. 渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳) (1986). *レトリックと人生*. 大修館書店.)
- Lakoff, G. & Turner, M. (1989). *More than cool reason : A field guide to poetic metaphor*. Chicago : University of Chicago Press.
- Martin, J. H. (1990). *A computational model of metaphor interpretation*. San Diego, CA : Academic Press.
- Martin, J. H. (1992). Computer understanding of conventional metaphoric language. *Cognitive Science*, 16, 233-270.
- Murphy, G. L. (1996). On metaphoric representation. *Cognition*, 60, 173-204.
- Ortony, A. (1979). Beyond literal similarity. *Psychological Review*, 86, 161-180.
- Ortony, A., Vondruska, R. J., & Foss, M. A. (1985). Saliency, similes, and the asymmetry of similarity. *Journal of Memory and Language*, 24, 569-594.
- 佐山公一 (1992). 言葉の“あや”の印象の分類 : 言語表現の心理的効果測定のための形容語尺度の選定. *教育心理学研究*, 40, 204-212.

- 佐山公一 (1996). 隠喩文の理解を支える慣習的比喩. 日本心理学会第60回大会発表論文集, 854.
- 佐山公一・阿部純一 (1990a). 日本語名詞述語文の意味解釈手続きについて. 情報処理学会自然言語研究会報告 (自然言語処理), 78-9, 65-72.
- 佐山公一・阿部純一 (1990b). 日本語名詞述語文の意味算定手続き: “文字通り”の理解から修辭的な理解まで. 日本認知科学会第7回大会発表論文集, 124-125.
- 佐山公一・阿部純一 (1990c). 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化 (II): その処理手続き. 日本心理学会第54回大会発表論文集, 684.
- Searle, J. P. (1979). Metaphor. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (pp. 92-123). Cambridge: Cambridge University Press.
- 山梨正明 (1982). 比喩の理解. 佐伯胖 (編). 推論と理解 (認知心理学講座3, pp. 199-213). 東京大学出版会.
- 山梨正明 (1988). 隠喩と理解. 東京大学出版会.
- Winograd, T. (1977). A framework for understanding discourse. In M. A. Just & P. A. Carpenter (Eds.), *Cognitive processes in comprehension* (pp. 63-88). Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.